

上田正昭著

帰化人

古代国家の成立をめぐる



日本史上最初の文明
開化に果した役割に
ついて通説をたどす

帰化人

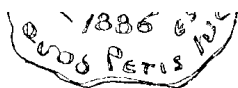
京都大学教授
上田正昭著

中公新書 70

¥340

中公新書

70



中公新書 70

上田正昭著

人 化 帰

古代国家の成立をめぐる

葉 山 春 美

中央公論社刊

上田正昭（うえだ・まさあき）

1927年（昭和2年）兵庫県に生まる。1950年、
京都大学文学部史学科卒業。専攻、日本古代
史。現在、京都大学教授。

著書『神話の世界』（1956、創元社）

『日本古代国家成立史の研究』（1959、青木書店）

『日本武尊』（1960、吉川弘文館）

『出雲の神話』（1965、淡交新社）

『大和朝廷』（1967、角川書店）

『日本古代国家論究』（1968、塙書房）

『大仏開眼』（1968、文芸堂）

『日本神話』（1970、岩波書店）

『日本の原像』（1970、文芸春秋）

『女帝』（1971、講談社）

『大王の世紀』（1973、小学館版「日本の歴史」2）

婦 化 人
中公新書 70

● 1965年

検印廃止

昭和40年6月25日初版

昭和49年5月20日16版

著 者 上田正昭

発行者 高 梨 茂

本文印刷 三晃印刷

表紙印刷 トープロ

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2-1

振替東京34 電話(561)5921代

まえがき

日本のあちこちには、朝鮮や中国などとのゆかりを示す地名や遺跡がかなりある。古い郡名や現在の町村名のなかにも、その関係をしのばせるものがある。古代日本の歴史の断面をみる想いにふけることがある。事実、それらの由来をたどってゆくと、古くさかのぼりうる場合が多い。それもそのはず、古代には朝鮮や中国などから海を渡ってきた人々がかなりあり、それらの人の多くはこの国土に土着して、各地でくらしをいとなんでいたからである。

しかも、たんにそれだけではない。日本へきた人々ならびにその後裔たちは、あるいは役人となり、あるいは農民や手工業者となつて、古代日本のなりたちにならぬ影響をあたえていた。飛鳥文化や天平文化の背景には、彼らのもたらした新技術や新知識が渦まいており、いわゆる「帰化人」の力は、古代日本人の生活に大きなはたらきをおよぼしている。もっと端的に表現するなら、日本古代国家の形成それ自体が、これら渡来者たちの母国の動向と深いつながりをもっていたのである。

もちろん、中世以降の歴史においても、日本に居住するようになった外来の人々がいる。そして、それらの人々の活躍が、日本国家の歩みに寄与しなかったわけではない。けれども、この国

に土着した人々の役割が、もっとも大きな力を発揮した時代は、やはり古代にあった。

それも文化の側面ばかりについてのみ、その役割が見出されるのではない。政治・外交のみならず、経済生活の分野においても、注目にあたいる活動がうかがわれるのである。「帰化人」というと、これまではとく限定された範囲で問題にされることが多かった。たとえば、「帰化人」の信仰についても、仏教の問題のみがうきばりにされがちであったが、わが国の固有信仰とのつながりにも密接なものがあり、民衆生活とのまじわりについても、貴族たちの世界における場合とは違ったふれあいがありなされていることも見逃せない。

本書にのべる「帰化人」の生活が、なによりもよくそのことを物語っている。にもかかわらず、日本人の一部にはいまだに「帰化人」を特殊視したり、あるいは極端に差別されていたかのように考えたりしている人々がある。しかし、そのような見方は不当な認識にもとづくものであり、民族的差別を合理化する結果になる。こういう考えは、古代の支配者層がいだいていた蕃国の觀念や近代日本の為政者らがつくりだした民族的偏見にわざわいされているものである。本書をひもといてくださるなら、そのような認識が、いかに誤ったものであるかが、より深く理解されるものと思っている。「帰化人」の考察は、従来はややもすれば文化の面ばかりに集中するきらいがないではなかった。そこで、私は政治・経済の面や民衆生活とのかかわりあいについての視点をなるべく多くもりこみ、これまでの片手落ちをすこしでも補おうと試みた。

だが「帰化人」の本格的な研究は、最近になってようやくさかんになってきたばかりである。その全貌を明らかにしてゆくためには、まだまだ未解決な問題が山積している。その渡来のうちねりも、けっして一度や二度限りのことではなく、土着化のプロセスにも複雑な様相がよこたわっている。しかも古代史料の多くは、支配者層に属する人々の手になるものであり、そこに記述されている内容が、どこまで信頼できるかという、古文獻そのものについての批判的考察もおろそかにできない。そこにはいくつかの謎がひめられているといつてよい。

本書は最近の研究成果に学びながら、「帰化人」の問題を再検討して、それらの謎の一斑に迫ろうとするものである。それがどこまで成功しているかは、読者のみなさんの批判にまたねばならぬが、東アジアにおける古代日本の姿を再発見することに、本書がすこしでも役立ちうるならばさいわいである。本書を足がかりにして、読者のみなさんが、みずからの眼で掘り下げていただくことを切望する。最後に、執筆にあたっているいろいろと手数をわずらわした中公新書編集部にたいして謝意を表する。

一九六五年六月

著 者

目次

序 帰化人群像

天平の奇偉——大仏開眼の背景 天平の模相 大仏造立のリーダー「帰化人」の地位と役割

王族の血脈——高野新笠の出自 藤原氏と秦氏 渡来の四段階

I 帰化以前

王化の思想——帰化の意味 化内の人 「古事記」の表現

渡来のはじまり——文化の交流 楽浪の文化 東夷の朝貢国 文化の伝播

三世紀の外交——倭国動乱の背景 邪馬台の国 顧問団の渡来

朝鮮の渦潮——日韓関係の発展 百済との交渉 七枝刀の謎

II 漢人・秦人の登場

倭寇の潰敗——辛卯の年 倭軍の敗北

史の活躍——アヤ・ハタの由来 文字の使用者 文氏の伝承

馬の文化——乗馬の風習 騎馬民族説 馬飼の地方 河内の文化

今來の才伎——あらたな技術人の渡航 技術の革新 今來の郡 始祖の伝承 鉄の文化

朝鮮の動向——百濟の危機 對外關係の變化

Ⅲ 古代國家の實力者

轉換の世紀——王權の動搖 執政官の交替 部民制の變貌

仏教の傳來——五經博士の活動 仏教受容の背景 神か仏か 百濟仏教の荷担層

政界への進出——漢氏の去就 天皇殺害事件 東漢氏の軍事力 文明の導入者 秦氏の進出 大藏官僚の背景 秦氏の信仰

Ⅳ 歸化氏族の命運

對外關係の推移——歸化のコース 渡來のうねり 百濟の役

土着の力——文運の隆盛 唐風文化の影響 新旧の動向

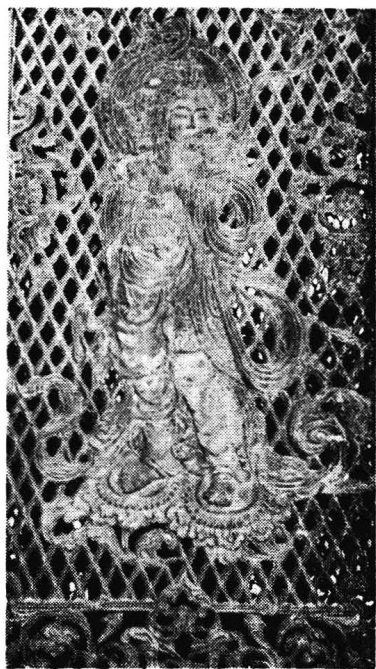
鎖國化の條件——蕃國の思想 出自の改變 差別の克服

参考文献

歸化人

序
歸化人群像

東大寺大仏殿燈籠（部分）



天平の奇偉

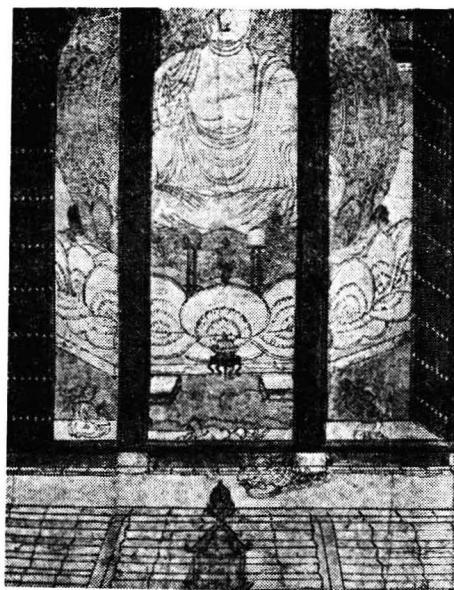
大仏開眼の背景

万葉の大宮人によって、あおによし寧楽の都……とうたいあげられた平城京は、ひとしおのにぎわいにつつまれていた。七五二（天平勝宝四）年四月九日のことである。東大寺毘盧舎那大仏の開眼供養のための盛儀が、いまおごそかに執行されようとしているのである。

開眼師、講師、読師らが入場し、文武百官が威儀を正し、内外の僧侶あわせて一万余人が参列して、その盛儀は進められた。五節舞、久米舞、楯伏舞のほか、唐や高麗などの楽舞が奏されて、莊嚴華麗の齋会の儀が終了するのである。

八世紀の終りごろの『続日本紀』は、その日を評して「なすところの奇偉、あげて記すべからず、仏法東帰より、齋会の儀、いまだかくのごとくさかなることはあらざるなり」とのべているのも、あながち誇張とはいえないものがある。

七四三（天平十五）年の十月十五日、聖武天皇によって大仏建立の詔が天下に示されてからここに九年。いくたの困難をへて、ようやく大仏開眼の時が到来した。おもえば、この九年の星霜には、政界内部にあっては、はげしい勢力の争いがあり、大仏造立の事業にたいする反撥もない



古代の大仏殿（『信貴山縁起絵巻』）

ではなかった。大仏造願の事業の推進に功のあった大僧正行基は、すでにこの世になく、さきに紫香樂の宮において、建立の詔を発した聖武天皇も、位を孝謙天皇にゆずって、いまは僧形の上皇（法号勝満）となっていた。東大寺の寺誌である『東大寺要録』のつたえるところによると、そのころの聖武上皇は「起居に便ならず」と記されるほど心身ともに疲労していた。事実、聖武上皇みずからは、開眼の筆をとらないで、菩提僧正がこれを代行した。

その仏は高さ五丈三尺五寸、顔の長さ一丈六尺、眉の長さ五尺四寸五分、目の長さ三尺九寸、口の長さ三尺七寸、耳の長さ八尺五寸、鼻の高さ一尺六寸、中指の長さでさえ五尺もあったという。

まさに大仏の名にふさわしい大きさである。

極楽浄土をあまねく照らす本尊としてのこの毘盧舎那仏の造立は、けっして容易な事業ではなかった。そのうえ、大仏殿の建立にも、多くの財力と労力が必要

であり、またすぐれた技術を必要とした。

『東大寺要録』には、材木の知識（奉仕者）は五万五千五百九十人、それらの造建に雇われた役夫百六十六万五千七百一人、金の知識三十七万二千七十五人、その役夫五十一万四千九十二人であったと記されている。

技術的にみても、まず大仏の背骨ともいべき骨柱をつくりあげねばならぬ。それを木の枠でかこんで、粘土砂などをぬりあげ、鑄造のもととなる塑像（ぎようざう）がつくられる。この原型から鑄型の外枠をとり、さらに原型の塑像から大仏の肉の厚みとなる中型（なかくて）を削りとって、外型と中型の間に、とかした銅を流しこむのである。溶銅のための炉も百数十にのぼるものであったとする。七四七（天平十九）年九月から大仏造立のための鑄込み（いこみ）が開始された。七四九（天平勝宝元）年の十月の完了にいたるまでの約三年間、大仏の外型のまわりにぎずかれた百数十の炉から、八度におよぶ鑄込みの作業がくりかえされたのである。それで作業が終ったのではない。その後においても補修が必要であり、塗金をするためのみがきをしなければならぬ。頭部の螺髪（りほつ）を一つ一つはめこんでゆく仕事だけでもたいへんな苦心を必要とした。それらに要した金・銀・銅や材木の量はたいへんなものであった。

塗金の作業はまだ完了してはいなかったが、そのような大事業が、一段落をつけて、ここに開眼供養がもよおされることになったのである。光明皇太后や孝謙天皇とともに、開眼の儀式にの

ぞんだ聖武天皇の心の中には、発願以来の世のうつりかわりが、走馬燈のようにおもいめぐらされたにちがいない。

天平の様相

われわれは、天平といえ、とかく七三四（天平六）年に廷臣の海犬養岡麻呂がうたった「みたみわれ 生けるしるしあり 天地の 栄ゆる時に あえらくおもえば」の歌にうかがわれるような栄光の王朝をイメージに描きやすい。だがそれは、天平の時期における宮廷官僚らの感懷を物語るものではあつても、天平年間（七二九～七四八）における現実の世相は、けつしてそのような栄光にみちみちたものではなかつた。

すなわち、じつさいには天平という名にふさわしくない政治の動揺が、そこに渦まいていたのである。天皇の即位があつてはどなく、皇族の出身であつた左大臣長屋王は、政争の犠牲者としてたおされ（七二九年）、ついで凶作がつづき悪疫流行の時をむかえて、役人や百姓らがあいついで多数死んでいった（七三七年）。娘を聖武天皇の皇后にした藤原不比等の子供の房前・麻呂・武智麻呂・宇合もこの年に病死している。しかも七四〇（天平十二）年には、参議藤原宇合の子にあたる藤原広嗣が、政治の得失を論じ、天地のわざわいをのべた表を朝廷におくり、天皇および皇后の信任をえて政界に重きをなしつつあつた僧玄昉、吉備真備の弾劾を行なつた。そしてついに広嗣は北九州の太宰府を拠点とする叛旗をひるがえしたのである。

このとき聖武天皇は、七一〇（和銅三）年以來の都城であつた平城京をはなれて、山城の恭仁に

おもむいた。そして叛乱が終熄するやいなや、恭仁の宮居の造営にとりかかるといふあわただしい世相が、そこにはおりなされていた。そればかりではない。当時の国家は律（古代の刑法）と令（古代の根本法）によって、政治的支配の秩序だてを計っていたが、その律令体制のたてまえもそのころには大きく動揺しつつあった。

つまり、律令国家による土地と人民の支配は、神社や寺院、有力な王族や貴族らの土地占有の拡大によって、しだいに切りくずされ、地方の豪族や有力農民による私的な富の蓄積もまただんだんと進んで、法秩序の根底は、大きくゆすぶられつつあったのである。

そのような政治的危機の深刻さが、おおいがたくなりつつあった時に、毘盧舎那大仏建立の発願がなされたのである。大仏造立の詔が出された年が、律令制的な土地国有の原則を大きく修正した墾田永世私財法の発布された年にあたっているのは、けっして偶然ではない。その両者の関連は、当時における政界事情をきわめて象徴的に物語るものがある。

墾田永世私財法というものは、もとより墾田の私有を全面的に認めた法令ではない。そこでは、墾田所有の最高面積は五百町に限定され、開田占地には国家の許可を要するなどの付帯条件がつけられてはいた。しかし、それは律令国家の草創期の態度よりすれば、大きな後退と譲歩を意味するものであった。発願の決意が、大仏建立の大事業の遂行によって、世の不安をぬぐいさり、宮廷の栄光と国家の安泰をいま一度とりもどそうとする、なみなみならぬものであったことは想

像にかたくない。

それは大仏造立の詔にみえる「それ天下の富を有^たつ者は朕なり。天下の勢^{いきおい}を有^たつ者も朕なり。この富勢をもつてこの尊像を造る。事やなりやすく心やいたりがたし。ただおそらくはいたずらに人を勞すること有りて、よく聖^{ひじり}を感じることもなく、あるいは誹謗^{ひぼう}を生じてかえつて罪辜^{ざいこ}に墮^だせんことを」という言葉にもよく表現されている。天下の富、天下の勢を凝集し、しかも造建への反撥を予想しながら、その大事業がおこされることになったのである。

大仏造立のリーダー

じっさいに大仏の鑄造は難事業であった。七四五（天平十七）年の八月から、本格的に仏像の製作がはじめられ、翌々年の九月には、その鑄造が開始された。高さ五丈三尺五寸の金銅像を造頭するためには、前にもすこしふれたように非凡な技術のうらづけを必要とした。七四九（天平勝宝元）年の十月、いちおうの鑄造がなるまで、工人たちの心血をそそいだ労苦が結集された。

だが、大仏開眼の盛儀の前提に、仏師らの労苦があり、人民の血のにじむ力役のあったことを、はたして参列者の幾人が想起したことであろうか。政争の渦のなかに、黙々として製作にいそしんだ工人たちのほとぼしる心血の結晶が、大仏の無辺の眼の、その奥の底にひそんでいることを、いったいどれだけの人々がしみじみと感得したことであろうか。

本書の冒頭を、大仏開眼をめぐる問題から書きはじめたのはほかでもない。この大仏鑄造には、